

## 言葉の持つ「限界と可能性」 -東日本大震災が見せた言語行為の諸相-

名嶋義直

東北大学大学院文学研究科

### 1. 言語の機能と伝達の形

- ・世界を叙述する機能  
事物や概念や想定に表示を与える。
- ・意味を伝達する機能
- ・コードモデル  
メッセージは送り手によってとしてコード化され、受け手によってコード解読される。この過程を経て意味が伝達される
- ・推論モデル  
コード化・コードの解読によらない意味の伝達

### 2. 「世界の叙述機能」の限界

#### 事例（1）

津波で被害を受けた現場に実際に立った多くの人が「言葉を失う」経験をした。

→目の前に存在している個別のモノや個別の状況は理解できるが、それを言葉で包括的に言い表せないという体験<sup>1)</sup>。

#### 事例（2）

「うわー、なんやこれ」

→目の前に展開する世界を叙述しようと試みているがそれに失敗していると考えられる。

#### 事例（3）

「あれはもう戦争やな」

→眼前の状況を別のモノで表している（比喻、この場合は「共通性」を基盤にした隠喩）。言い換えれば、それ自体をうまく叙述することができないから比喻という方法を使ったとも言えるのではないか。

- ・有限の要素を組み合わせることで無限の「生産性」を手に入れたはずの人間の言語だが、その叙述機能には、一種の限界があると考えられる<sup>2)</sup>。

### 3. コードモデルの限界

#### 事例（4）

「直ちに健康に影響が出る恐れはありません」

→なぜ我々はこの発話を聞いて安心するどころか逆に不安になるのだろうか。それは関連性理論の言い方で言えば、私達が「今ここでどういう影響があるか」という観点では「十分に満足する意味」を見出せないからである。一方で、「将来健康に影響が出る」ことになっても事例（4）の発話者は責任を問われることはない。「将来のこと」は何も述べていないからである。

#### 事例（5）「午後〇時〇分、爆発的事象が確認されました」

→「爆発」も「事象」であるから虚偽の報告ではないが、「爆発しました」と言わなかったのはなぜか。そもそも「爆発的事象」を「爆発」と考える人がほとんどではないか。

#### 事例（6）「放射線量は、胸のレントゲン一回分より低い」

→この発話内容は絶対的な数値だけ見れば真であるが、居住者は24時間そこにいて放射線を浴びれば24倍の数値になるということを全く考慮していない。ただし、考慮していないことをあからさまに明示してもいない。「低く見積もった」と批判されても責任は負わない。

・メッセージの受け手は、「相手が与える意味」だけでなく、「自分にとって充分満足できる意味」を求めることを示している。これらの事例は、災害時における「エリート・パニック」<sup>3)</sup>の一種であると思われる。その観点から見れば、批判的語用論において重要なテーマとなろう。

### 4. 「意味の伝達機能」は必須か

#### 事例（7）

「持ってこないのなら、『なにか必要なものありますか』なんて聞くな」

→これは「ただ聞くだけなら聞かないでくれ。期待してしまうから」ということ。答えた側としては、意味の伝達をしたのにそれが行動に反映されなかったための怒り。意味のずれの存在。

#### 事例（8）

「なんでこんなことになっちゃったんだろうね」

→「質問」という言語行為は発話者に情報の欠落がありそれを埋めるために情報を保有する相手に情報提供を求める行為である。この発話者は隣にいる発表者に答えを求めているのだろうか。そもそもこの問いに答えはあるのだろうか。果たして答えられる人がいるのだろうか。

#### 事例（9）

「皆さんに手伝っていただいて、もうちょっと頑張ってみようと思えるようになりました」

→自分の気持ちを伝達したいという意図がある。

事例 (10)

「死んだ方がよかったって言ってた人もいたけど、私は生きてる方がいいわ」

→「主張」という言語行為は命題の真偽判断を下したり、自分の考えを他者に示す行為。この発話者は「私は生きている方がいい」という命題の真偽判断を下したり、隣にいる発表者に主張したりしているのだろうか。

事例 (11)

「最初に言っておきますけど、ここはまだ搜索していませんので…」

→行方不明者が出てくる可能性があると言いたいのだ、と発表者は理解したし、それが言いたかったと推察することはその文脈において生じうる他の解釈より合理的。意味の伝達あり。

事例 (12)

「あそこの家の前で一人、向こうの家の前で一人」

→この発話は発表者の質問に対する答えではない。お昼休みに問わず語りでしゃべりだした時の発話である。発話者は何を伝達したかったのだろうか。如何に悲惨な状況だったということ伝えたいのだろうか。意味の伝達を意図しているのだろうか。

事例 (13)

「話を聞くのも災害ボランティアの仕事です」

→伝達行為の受け手に立ちただ聞くことそれ自体が重要だとしたら、それは「意味の伝達」を実現するためというより、「聞く」こと、「やりとり」を成立させること、「発話できる環境を作り出すこと」に意味があるということにならないか。「傾聴ボランティア」と同じことか。

事例 (14)

「子どもがあのおねと話を振ってきたときに聞いてあげられる人になる」、「聞き手であり、話し手ではない」、「忠告を止めて、話の方向を変えることなく、自分の経験を話すことなく、修正しようとすることなく、そのまま話を聞くこと」、「そんな風を感じているのはあなた一人じゃないよとを感じる機会をつくる。共感する機会があると、(以下省略)」<sup>4)</sup>

→「話すこと」・「話を聞いてもらえること」が子どもにとって重要だと述べている。そこでは「意味の伝達」は最優先課題ではなく、「ただ受け止めること」を最優先しているように思える。

・我々の言語使用の中には「意味の伝達を意図している」場合と、「意味の伝達を意図していない」場合があるのではないか。事例 (13) (14) から考えると、事例 (8) (10) (12) は、「誰かに向かって発話することそれ自体」が目的なのかもしれない。もしそうだとしたら、それは「言語の機能」として認めるべきものだろうか。

・それが機能だとすると、いわゆる「交感的機能 (phatic communion)」や「交話的機能 (phatic function)」<sup>5)</sup> に近いようにも思われるが、同じではないかもしれない。「人間関係の確立や確

認」を意図しているとは思えない事例もあるように思われるからである。

## 5. 言葉は社会を形成するのか、それとも社会を断絶させるのか

事例 (15) 今まで話したことがない人と話す。たとえば、給水を待つ列で。

事例 (16) 今まで話したことがない人と情報交換し、気前よくモノの融通をしあう。食べ物やおむつや自転車など。

事例 (17) ボランティアグループなどの新たな共同体の出現。それへの帰属意識と幸福感。

「このボランティアの皆さんと一緒にいることが、不謹慎な言い方かもしれないけれど、とても楽しい」と語り「また戻ってきます」と言って本当に戻ってくる遠方からのボランティア。発表者も同様の感覚を抱く経験をした。

事例 (18) 日本人と外国人が混在している地域で、両者がそれぞれ別々に避難をした。また、後日両集団が、同時間に近接する場所で別々に炊き出しを行っていた。震災以前より相互の交流が希薄になっていたように観察された。

事例 (19) 地震後、乱立した「外国人向け情報提供サイト」。分断と孤立を引き起こさないか。

## 6. 今後の課題-言語の持つ可能性の探究-

- ・外国人日本語学習者の誤用（逸脱した例）がしばしば日本語研究のヒントを与えてくれるように、東日本大震災が我々に強いた「非日常」の中に、「言語行為」という「総合的な人間の営み」を探究する「研究の芽」があるように思われる。

### 注

- 1) 2011年5月29日付け朝日新聞「読むぞ！ホップステップジャンプ」でも、本田由紀氏（東京大学教授、教育社会学）が同様のことを述べている。
- 2) 時間をかけて言葉を選べば叙述は可能であるかもしれないが、「今、ここで」叙述できないという点では限界があると言ってよいと思われる。
- 3) レベッカ・ソルニット著 高月園子訳『災害ユートピア なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』、亜紀書房。
- 4) あしなが育英会（2011）「大切な人を亡くした子どものグリーフをサポートするファシリテーター養成講座」資料，pp. 5-7.
- 5) あいづち，時候の挨拶，冗談，コメント，近況報告，自己開示，世間話などがこれに該当する。それらの目的は「人間関係の確立や確認」にあるとされる。林宅男 編著（2008）『談話分析のアプローチ 理論と実践』，研究社。